



石川達三
作品集
15

石川達三
青春の蹉跌

新潮社版

青春の蹉跌

石川達三作品集第十五卷

昭和四十七年九月二十五日 発行
昭和五十年三月五日 四刷

定価 八五〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)六六五二二
編集部(〇三)六六五二二
振替 東京四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1972 Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

僕たちの失敗

5

青春の蹉跎

233

解題

久保田正文

383

青春の蹉^さ跌^て

僕たちの失敗

結婚について

結婚ということについて、僕は懷疑的だった、懷疑的ではあったが、否定的ではなかった。結婚は、否定するわけには行かない。否定したら人類は絶滅するし、第一、人生がおもしろくない。ただ、どういうかたちで結婚するか、どんなかたちの結婚生活が現代の僕たちに最もふさわしいか。そのことにはいろいろ問題がある。僕はその事で悩んでいた。しかしそういう悩みは、あまり苦しいものではなかった。

僕は伊吹まさ子を愛していた。愛していたということには原因もなにも無い。好きになったから好きになっただけのことだった。僕は恋愛が神聖だなどと思ったことは一度もない。むかしの詩人は恋愛を美化することが好きであつたらしいが、僕はなにも恋愛を美化しなくてはならないとは思わない。恋愛は本能から出発した感情であるのだから、動物的だ。恋愛が神聖だと言うのなら、鳥やけだもの行為もみな神聖だということになる。僕

はそういう風にひねくったり美化したりごま化したりしたくない。在るがままの自然な姿で恋愛を考えて行きたいと思つていた。

しかし僕は伊吹まさ子を愛したことによって、まさ子を実際以上に買いかぶつたり、理想の女性、完璧な女性みたいに幻想したりしたことが、無かつたとは云えない。まさ子はすこし背丈がひくかつたが、僕は、そのくらいがちょうど可愛い背丈だという気がした。僕より大きいような女は女みたいな気がしない。それから、まさ子はすこし気が強くて我儘なところがあつた。僕はそれを、まさ子が伶俐なせいだと考へていた。そんなことはどう考へようと僕の勝手で、誰に迷惑がかかることでもない。他人に迷惑のかからない事ならば、僕は何をしてもいいと思つていた。

僕はあるとき、仲間の稲垣次郎にむかつて、結婚ということについて懷疑的になつてゐることを話してみた。すると稲垣はひやかすような笑い方をして、こう言つた。「馬鹿だなあ福田。結婚というものは二人でするものなんだよ。お前がひとりで懷疑的になつてゐたって、相手がどう思つてゐるかわからんじゃないか。」

お前の相手は伊吹まさ子だろう。あれは個性的で伶俐な子だ。俺なんか、とてもじゃないが身がもてないよ。

お前は大学出だからいいかも知れんが、向うはどうなんだい。やっぱり懷疑的か。二人で懷疑的になっていたんじゃ、結婚はだめだな」

なるほどそうだ、と僕は思った。僕は懷疑的になってはいたが否定的ではなかった。本当は何とか合理的な、納得できるような形式と方法とを発見して、結婚したかった。結婚ということはぜひぶん楽しいことに違いないと思っていた。しかし結婚の失敗ということも無数に実例がある。失敗したらどうするか。僕は要心ぶかい性質であつたから、先の先まで考えてみるのだった。しかしいくら要心ぶかく考えていても、失敗することは必ず有る。失業、病氣、経済不況、災難、戦争。僕の力でそのすべてを防ぎ止めることなどは、とうてい不可能だ。

僕は稲垣次郎の忠告にしたがつてみようと思ひ出した。

つまり、ひとりで懷疑的になつて居たつて結着はつかないから、二人ではなしあつて見ることにした。それで、二人の意見がまるで違つていて、妥協の余地がないものとわかれれば、僕の恋愛はそこであきらめるべきだと思つた。恋愛というものはそういうものであるべきだ。二人のあいだに妥協の道がなければ、その恋愛は整理してしまふべきだ。そして他にあたらしい対象をもとめるべきだ。要するに恋愛というものは一つの過程であり手段であつ

て、それ自身が目的ではないのだから、結婚の可能性がまったくないときには、恋愛だけにこだわっているのは愚劣だと僕は思つた。だから、早く伊吹まさ子と話し合つてみて、可能性があるならば局面を進展させる、可能性がなければ彼女の幸福を祈つて、握手をして別れる。それが一番手つとり早い方法だと思へた。

そこで僕は或る日、工場が引ける前に係長にきいてみた。

「今日は残業、ありますか」

「無いよ」

「全部無いんですか」

「経理が残業だと思ふ。決算期だからな」

「無いよ。何だつてそんなことを訊くんだ」

僕は終業と同時に手を洗つて飛び出した。女子工員は着物を着かえたり化粧をなおしたりするから、必ず十分ぐらい遅れる。僕はオートバイを曳き出して工場の出口にまわつた。そして、そのあたりを小さく旋回しながら待つていた。女たちがぞろぞろと出てくる。

「福田さん乗せて……」と組立部の女工が言う。

「だめだよ。人を待つてゐるんだ」

「知つてゐるわ。伊吹さんでしよう」

「うるさいな。早く帰れよ」

女の子は憎たれ口をきいて、行ってしまう。僕は良い気持だった。僕は、もしも伊吹まさ子にことわられたらどうするか……そんなことは考えていなかった。ことわられることも当然ある筈だ。彼女に愛人があるかも知れない。また健康上の理由もあるかも知れない。僕はそんなことを一切考えていなかった。

ことわられたら問題は白紙にかえる。僕が伊吹まさ子を愛しているという事実だけが残るが、これも白紙に返すべきだ。そういう風に自分の心の整理をつけるべきだ。(整理がつかなくなったらどうするか。どうしても思い切れなかったらどうするか)……そんな事は僕は考えていなかった。整理してしまえばいいのだ。

やがて伊吹まさ子が友だちといっしょに出て来た。短いダスターコートの下に緑色のチェックのスカートをはいている。しゃれた姿だ。僕を見つけて少し笑った。僕はただ単純にうれしくなった。僕は恋愛がはずかしい事だとは思っていない。だから誰かに知られたくないという気持ももっていない。僕の父ぐらいの年齢の人たちは、恋愛を神聖だと思っていたらしい。そのくせ恋愛をはずかしがっていた。矛盾したはなしだ。僕はハンドルを廻して伊吹まさ子の眼のまゝに車を持って行った。

「伊吹さん、乗らないか」

伊吹まさ子は一瞬、立ちすくんだような格好だった。急には返事ができなかったらしい。すると一緒に歩いていた仲間の女工たちが口々に、あぶないからだめだとか、男の誘惑に乗ってはいけなとか、やかましくしゃべり立てた。おしゃべりの全部は、乗ることに反対の意見だった。つまり全部の女たちが一斉に軽い嫉妬を感じていたのだ。しかし、そのために却って伊吹まさ子は決心がきまつたらしかった。

「どこまで乗せて下さるの？」と彼女は言った。

「君のうちまで送ってあげるよ」

「大丈夫かしら」

「大丈夫だよ。殺しやしないよ」。

まさ子は黙ってオートバイのうしろの、小さな席になめな腰をかけた。女たちがまた騒いだ。僕は走り出した。工場の門から道路にあふれた何百人という男工女工の群れを左右にかき分けて、僕は快適に走った。

「しっかりとまって居るんだよ」と僕は言った。「僕のベルトにつかまるんだよ」

まさ子は僕の腰のうしろのところのベルトに手を入れた。僕は走りながら、ベルトにつかまっている彼女の手を愛していた。僕はまだ一度もその手に触れたことは無

かった。一人のときと違って車は重かった。その目方がまさ子だった。僕はその目方を愛していた。僕は何となく、もはや伊吹まさ子は赤の他人ではないような気になっていた。僕のオートバイが、まるで花で飾られた二人の結婚の馬車みたいだった。

三分ばかりも僕は黙って走った。何か言いたかったが、どういふ言ひ方をしたらいいのか見当がつかなかった。そのとき伊吹まさ子がうしろから僕に声をかけた。

「福田さん私に何か、用があったの？」

ああ惻い口な女だ、と僕は思った。僕がなにも言わないうちに彼女はちゃんと察していたのだ。そして、僕が言い出し兼ねていることを知って、向うから発言の機会を与えてくれたのだ。僕は急に元気づいて言った。

「そうなんだ、用があるんだよ。折入ってな、相談したいことがあるんだ」

今度はまさ子は黙っていた。黙っているのがつましきだった。黙っていることが、僕の言いたいことの内容を知っている証拠だった。同時にまた、いつでも拒否することができるよう、一歩しりぞいて相手の様子を見ようとする、女らしく要心ぶかい態度でもあった。

「実を言うとな、伊吹さん……」と僕は大きな声で言った。大きな声でないと、うしろの人には聞えにくいから

だった。「実はね、急にこんな事を言つてすまないけどね……僕は君と結婚したいと思つてゐるんだよ。だからさ、一つ考へてみてくれないか」

オートバイは四十五キロの速力だった。広い道路の街路樹のみどりが流れるようにうしろに走つてゐた。伊吹まさ子はだまつてゐた。しかし彼女の両手はしっかりと僕のベルトにつかまつてゐた。僕はもう一度声をかけた。

「ねえ伊吹さん、考へてみてくれないか」

「考へてみるわ」と彼女は言った。「でもわたし、福田さんのこと、なんにも知らないのよ」

僕はふつとかなしい氣持になつた。(福田さんのこと、なんにも知らないのよ)というまさ子の言ひ方が、とても純真で、可愛かつた。

「知らなくたっていいんだ。段々に解つてくるさ」と僕は言つた。「僕だつて君のことを、たくさん知つてゐるわけじゃないよ。だけどね、お互いに好きならそれでいいと思うんだ」

恋愛というものは、おたがいによく知つてゐるから愛するといふわけのものではないと思ふ。好きになる動機などは、きつと單純なものだ。好きになつてから相手を知りたくなる。それからたくさんの知識をむさぼる。そして、知れば知るほど好きになつて行く。何だつて良い

方にばかり解釈してしまうからだ。つまり、自分勝手にまちがった解釈をする。そのまちがいは、結婚してから徐々に姿をあらわして来る。だまされていたような気がする。だから恋愛結婚というものは、案外に命がみじかい。

みじかくてもいいじゃないかと僕は思った。みじかくても、その間に充分に楽しい時間があるに違いない。一生つづいた結婚が必ずしも立派で理想的であるとは限らない。僕はみじかくてもいいから楽しい結婚生活をもちたかった。

要するに恋愛というものを、僕はあまり信じてはいなかった。日本中に女は何千万人も居るのだ。偶然にそのなかの一人を発見した男は、これが自分の理想の女性だと信じてしまう。信じるだけの根拠がどこにあるかという、どこにもない。理論的には有り得ないようなことを、恋愛する人はかんたんに信じてしまう。そして、眼が美しいとか、声がきれいだとか、笑顔がたまらないとか、愚にもつかない理由をならべ立てる。ところがそんなものは日常生活とは根本的には何の関係もない、アクセサリーにすぎないのだ。

そんなことは解っている。わかっていくくせに、僕は財布のなかの最後のおかねで、米を買おうとはしないで

カーネーションを買うようなことをしてしまうのだった。僕たちの年齢では、時として、米の飯よりも花の方がほしいこともあった。そういう不合理が美しいのだ。僕は不合理の魅力に曳かれて、伊吹まさ子を愛していた。いつまで続くかは知らないけれども、僕は彼女に溺れてゆきたかった。もっと本当のことを言えば、彼女に溺れてゆくところまで、自分を溺れさせてやりたかった。

ゴー・ストップで止ったとき、僕はふり向いて言った。
「オートバイ、好きかい？」

まさ子はほのかに笑って、うんとうなずいた。子供みたいな返事の仕方だった。荒々しい風に吹かれて、彼女の頬は赤くなっていた。まつ毛の長い、きれいな眼をしていた。

「君のうちに、何か飲むもの、有るかい」

「番茶だけしか無いわ」

「番茶、ごちそうしてくれるかい」

「ええ……だけど、私のうち、男の人なんか来たこと無いのよ」

「いいじゃないか。番茶飲んだらすぐ帰るよ」と僕は言った。

「その郵便局のところを左へまがるの」とまさ子はうしろから言った。「曲ってから左側の、五軒目」

伊吹まさ子は小さな木造アパートに住んでいた。六畳に台所がついただけの貧しい部屋だった。僕は部屋のなかをじろじろ見まわした。彼女はガスで湯をわかし、僕のために番茶をいれてくれた。それから黒砂糖の飴を出してくれた。

僕の下宿とちがつて女の部屋というものは、ひとりきりでも一応は家庭のかたちをしているものらしかった。ここに僕が坐^まって居れば、もう新しい家庭とおなじことだった。して見ると、家庭というものは女が造るものらしいと僕は思った。女と子供とを入れて置く場所が家庭であって、男なんか本当はどうでもいいらしい。

工場で見るときの伊吹まさ子は、たくさんの研磨機にとりかこまれて、忙しそうに立ちはたらいで居る。しかし機械と彼女とは関係がない。彼女は孤独だ。終業時間がくると機械はとまる。彼女は帰り支度をする。それで終りだ。一生おなじ職場ではたらいににしても、機械は機械、女工は女工。彼女はどこまでも孤独だった。

しかしいま、この部屋の中で見ると伊吹まさ子は、まるで違っていた。茶道具も机も鏡台もカアテンも、彼女のものであり、彼女の付属物であり、血が通っていた。彼女が留守のときでもこれらの家具はやはり彼女のものでは

あり、彼女の匂いをふくんでいるだろう。そして、それらの家具にとりかこまれて坐っているとき、伊吹まさ子は女らしく、落ちついていた。女というものは、身のまわりの沢山の道具類や衣類にとりかこまれているときに、一番完全に女であるらしいと僕は思った。僕はそういう生き生きとした彼女の姿を見て、すこし彼女を理解しようとした。

「ほんとに、まじめな話なの？」とまさ子は伏目になって言った。

「僕はまじめだよ。だから一つ、具体的に相談して見ようじゃないか。事務的なことから言うと、第一に僕は、誰もほかに婚約もしていないし、恋愛関係もないんだ。君は誰か特別にしたいとか、約束をしたとか、そういう人が有るかい」

「手紙をくれた人なら有るわ」

「ひとり？」

「三人ぐらい。でも返事は出してないの。何も無いと同じよ」

「過去に於ては？」

「何も無いわ」

僕はそれから二人の健康状態について話しあい、何の故障もないことを確かめた。次に、僕の職業について、

まさ子の方に不満とか注文とかが有るかどうかを確かめた。

「僕はあまり出世はしないよ。係長までなら確かだが、部長まではどうかな？」

「そんなことは、別に何でもないわ」とまさ子は言った。その次に僕は二人の収入をたしかめてみた。僕は毎月二万三千円から四千円。残業によって多少の変動がある。伊吹まさ子は一万五千円見当だった。

「すると二人で三万八千円か九千円だ。ゆっくり暮せるな」

「そうね……」まさ子は気乗りのしない様子だった。それから彼女は変なことを言った。

「福田さんは大学出だって誰か言っていましたけど、本当ですか」

「ああ、本当だよ」

「それじゃ、駄目^{だめ}だわ」とまさ子は小さな声で言った。

「あなたはどんどん出世して、工場長になったり重役になったりするでしょう。私は高校の中途で、学問も教養もないから、その時になったら、あなたに棄^すてられるわ」

「ばかな事を言うんじゃないよ。僕はただの職工じゃないか。それに、万一重役になったにしても、それは三十年も先のはなしだろう。それまで君は生きてるかどうか

も解らんじゃないか。もしも戦争がおければ、原爆でもって日本が全部ふっ飛んでしまいかも知れないんだ。そんな、先の先のことを心配して、そのために現在の幸福を棄^すてるという法があるかい」

「そうね」とまさ子は言った。「いいわ。福田さんが重役になったら、棄^すてられてもかまわないわ。わたし、煙草屋^{たばこや}か駄菓子屋の店でもひらいて、何とか暮して行きま^す。男の人なんて、頼^{たの}りにならないもの……」

「そうさ。女だって男だって頼^{たの}りにはならないよ。うまく行かなくなったら仕方がないんだから、巧く行くあいだ丈でも楽しい家庭を持てばいいと思うんだ。そうじゃないか」

まさ子は黙ってうなずいた。

僕は大学の法科を卒業した。なまけものの学生であつたから、法律家にもなれないし外交官にもなれなかった。だから平凡な役人になるのが一番いいと思った。役人は特別な落度がないかぎり、停年までは首を切られることがない。ベース・アップ要求のストライキのときなどは、知らん顔をして居れば、なまけ半分勤めていても何とかやって行けるだろう。そこで法務省の試験をうけてうまい具合に合格し、官庁づとめをはじめた。

それが僕の第一の失敗だった。役人というものは首を

切られることが無いかわりに、無数の規則や法律にしばられていたのだ。その規則や法律におとなしく縛られた人間だけが停年まで月給をもらえろという仕掛けだった。僕みたいな我儘な人間にはとてもつとまるところではない。

僕は九月と十日で、依願退職した。僕は出世を望むよりも自由を望んでいた。自由な仕事がどこかにないかと考えて、見習いの工員になろうと思った。僕は工員募集広告を見て、アルプス・カメラの工場へ行ってみた。

僕はラジオやテレビの組立を学生時代にさんざんやっていたので、すぐ採用された。

そして最初はファインダーの調節の仕事、次に研磨機の仕事、それから本工員になって、レンズのコーティングの部屋にまわった。工場の仕事は単純で、誰にだって出来る。カメラ工業は景気がよかったから、給料も案外よかった、ボーナスもよかった。

僕は年末のボーナスで中古のオートバイを買った。通勤の電車が無茶苦茶に混雑するから、もう電車などのお世話になるまいと思って買った。朝の電車は人権を無視している。僕はなまけ者だけれども、自分の人権だけは大切に考えていた。だから伊吹まさ子の人権をも大切に考えていた。

一週間ばかり経ってから、僕は工場の帰りに稲垣次郎をさそって、焼鳥屋でビールを飲んだ。稲垣は僕より一つ年下の二十六だが、二十四のときに結婚して、もう秋には父親になる予定だった。もっと正確にいうならば、(父親にならせて貰える予定)だった。つまり女房が母親になるから、それと同時に彼は自動的に父親になるのであって、彼が自分の意志と努力とで以て父親になるわけではなかった。すべて女房のおかげだった。

「どんな気持だい」と僕はきいてみた。

「それや君、何ともいえない気持だよ。つまり、何というのかな、俺のあと継ぎだからな」と彼は言った。

「あと継ぎか。……何を継がせるんだい。君の、あぐらをかいた鼻のかたちか。それとも君の、酒好きな胃袋か」

「何とも言うがいい。君には父親の心境はわからないよ」

「解りたくないね」と僕は言った。「僕は結婚することにきめたけれども、子供は産まないつもりだ」

「え？ 結婚するのか」と稲垣は叫んだ。「伊吹まさ子か」

「もちろんだよ」